

野球が地域を元気にする

大阪駅から特急「くろしお」で約1時間20分。有田みかんで知られる和歌山県有田市の箕島駅に着く。甲子園で公立校唯一の春夏連覇を成し遂げた県立箕島高校の最寄り駅だ。

駅前通りを歩く人は少なく、店舗もまばら。人口はピーク時から1万人減り約2万5千人になった。

箕島野球部を率いた監督の尾藤公さんは1995年に勇退した。その後、社会人野球チームの立ち上げに尽力したことはあまり知られていない。

そのチームがいま、地元の活性化に欠かせない存在になっている。

「尾藤さんがいたからこそ、今の我々があるんです」。社会人クラブチーム「マツゲン箕島」監督の西川忠宏さん(64)はそう話す。箕島野球部で尾藤さんの指導を受け、77年の選抜大会で優勝した内野手だ。

卒業後、企業チームでプレーしたが選手生活は短かった。「まだ野球を諦めたくない」。西川さんは、元野球部員らが集まって野球をできるよう、96年にクラブチームを作った。恩師の尾藤さんに相談すると、自ら設立の資金集めに駆け回ってくれた。たちまち2千万円が集まったという。

和歌山総局

白木 琢歩記者

関西リレー NOTE

それから約30年。卒業生の草野球チームは、今やクラブチーム日本一に7回輝く強豪に成長した。人口流出が止まらない地方都市に、若い選手が毎年県外から移住してくるようになった。

主力スポンサーのスーパー「マツゲン」が雇用を保障するので、選手に生活の不安はない。いま地方の企業の多くは人材確保に頭を悩ませるが、マツゲンには野球を続けたい優秀な若者が次々と入社する。会社に残り、幹部となって経営に携わる元選手も現れた。

先月の全国大会には京セラドーム大阪(大阪市)に1500人の大応援団が駆けつけるほど、地域に愛されている。かつて箕島野球部の活躍は市民の誇りだった。いま再び、野球が地域の活力源になっている。そんな物語を連載「もう一つの箕島」で書いた。貴重な資料映像を使いつつ、チームのいまを追った動画もぜひご覧頂きたい。



連載「もう一つの箕島」の初回は
こちらから

しらき・たくほ 2006年入社。米大リーグや国内外で高校野球の取材経験あり。「野球は人生の縮図」(尾藤公さん)という名言に深くうなづく50歳。

